令和7年度　京都府立洛東高等学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（最終段階）

令和8年3月30日

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
めまぐるしく変化し複雑で予測困難な社会の中で、時代が求める「学び」への取り組みを進め変化を前向きにとらえて主体的に行動し、夢と希望を持って自立的に未来を切り拓いていくための知識・技能及び、変化に対応する力を身に付ける。豊かでたくましい人間性を育み、キャリア教育を充実させる。 ◎「洛東高校生」としての誇りを持ち、自らに人間的成長を図る生徒の育成 ◎自己の将来を展望し、目標達成に向け何事にも意欲的・探究的に取り組めるための支援の推進 ◎知識・技能に加えて学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力等を確実に育むために主体的・対話的で深い学びの推進 ◎様々な行事や体験活動、部活動を通してソーシャルスキルを身につけ、公共心や他者を思いやる心など、豊かな人間性を育む ◎情報や情報技術、ＩＣＴ機器について深く理解し、自らの学びに取り入れる。また情報技術、ＩＣＴ機器を活用した校務のＤＸ化（デジタル・トランスフォーメーション）を推進する。 ◎地域とともにある学校として、コミュニティスクールの取り組みを充実させるとともに、将来の社会の担い手として地域社会に貢献できる力を育む	・スクールミッション、スクールポリシーにより、「洛東高校のグランドデザイン」を明確にし、教科・分掌の指導が一体となる体制づくりとともに、効果的な広報活動を展開する。 ・新学習指導要領に基づいて、授業デザイン、観点別評価の両面から、さらなる研修を進めるとともに、評価の観点を明確にした評価計画を作成し、指導と評価の一体化を図る。 ・ICTの利活用を基盤とし、一人一台端末の効果的な活用をさらに進めるために、各教科が連携して取り組みを推進する。加えて、教科の枠を超えた教材の研究や研修を深化させ、ICT教育のみならず、教育現場全体のDX化（デジタル・トランスフォーメーション）を図り、生徒一人一人の学びの質を向上させる環境を構築する。 ・学習習慣の定着、希望進路の早期決定と実現、基本的生活習慣（遅刻、身だしなみ、家庭学習・授業への取り組み姿勢等）について、教務部・進路指導部・生徒指導部が中心となって相互に関連付けを行い、一人ひとりに寄り添いながら、具体的でわかりやすい指導を学年部と連携して行う。 ・各学年の課題を明確にし、継続的・発展的な進路指導ができるよう、学年・教科と連携して具体的な仕掛けづくりを進めることで、自学自習の習慣を確立するとともに、自らの未来を具体的にデザインし、進路実現を図る体制を構築する。 ・持続可能な社会の構築の視点から環境整備・美化活動を推進するための取組を、美化委員会と一緒に進める。 ・スクールカウンセラーやSSW、外部の諸機関と連携し、様々な課題を抱える生徒への対応を進める。 ・3年間を見通した組織的・系統的なキャリア教育の構築と実践のため、地元地域の力を生かし、今年度のインターンシップ教育を進める。	**◎時代が求める「学び」への取り組み** ・主体的学びへの高いモチベーションの構築 ・対話的学びへ向けたコミュニケーション能力の向上 ・「深い学び」及び「個別最適な学び」に向け、ハイスペックPC等ICT機器を整備・活用した教育活動を充実させ、教育のDX化（デジタル・トランスフォーメーション）を推進する。 ・学力に応じた手立てと指導の工夫 ・規律ある学び風土の醸成 **◎豊かでたくましい人間性の育み** ・自己有用感やコミュニケーション力を向上し、他者を思いやり良好で発展的な人間関係を構築する力を身につける ・行事等を通して非認知能力を育み、人格形成を図る ・学校生活全般における生徒の主体的参加の推進 ・部活動の積極的参加と体験活動の充実 ・地域、保護者とともに、次代の社会を築き、守り、担う人材（生徒）を育てる **◎キャリア教育の充実** ・基礎的・汎用的能力の育成を踏まえたキャリア教育の計画・実践 ・3年間を見通した組織的・系統的なキャリア教育の構築と実践 ・地元地域の力を活かしたキャリア教育の推進 ・インターンシップ教育の実施

評価領域	重点目標	具体的方策	中間	最終	総合	成果と課題
教育課程 学習指導 （教務部）	単位不認定者を出さない学習指導を行う	毎日の授業の積み重ねや、課題に取り組んだことによる成果物の提出が考査の結果、成績に表れる。このような「やればできる」ことを生徒が実感できる学習指導を行う。課題のある生徒に対しては、個に応じた丁寧な指導を行う。教科担当者、担任をはじめ学校全体で支援を行っていく。	B	B	B	各教科において、生徒の実態を踏まえ、学習内容を精選するとともに、どのように授業展開を行い、何を生徒に学ばせるかということを念頭に置きながら、生徒に寄り添った指導を展開していただいている。特に今年度は考査前学習会や夏期休業中の成績不振者を対象とした補習を充実させるなど、生徒一人ひとりの課題に応じた丁寧な指導を行っている。学年末へ向かうにつれ参加者も増え、自分の課題に向き合う姿が見られた。引き続き、丁寧な指導を継続し、生徒の学習に対する姿勢を育てていきたい。「主体的・対話的で深い学び」を目指し、日々実践を積み重ねていただいているが、各教科において、その実践例を共有する場が限定的である。6月と11月に公開授業週間を設けており、教科を超えて教員が学び、活発に意見交換できるように働きかけていきたい。また、日ごろから授業見学や授業研究が活発に行われるような体制づくり、環境づくりを行っていきたい。
	将来像を描けるような学習指導を行う	生徒自身が「将来の自分のためになる、そのために勉強が必要である」と実感できる学習指導を行う。学習内容の定着を図るにあたり、「主体的で対話的な深い学び」を実現できるよう、授業形態や授業の進め方を工夫する。	B	B		
	生徒が興味を持つ授業づくりのための工夫を行い授業力向上を目指す	公開授業週間や研究授業を積極的に活用し、若手、ベテランを問わず意欲的に研鑽できる機会をもうけ、授業改善や授業力向上を図る。一人一台端末の効果的な活用の手法を学び、生徒一人一人の学びの質を向上させる授業づくりをめざす。	C	B		
生徒指導 （生徒指導部）	基本的生活習慣の確立、規範意識の醸成を図り、主体的に行動できる態度を全教職員と協力して、育成する。	自分自身を第三者目線で見ることや自身の行いを振り返り、落ち着いて学習に向かえる環境を作り、自律できる力を育むことで、生徒指導件数減少につなげる。	B	B	A	日常の生活指導においては、朝の遅刻や身だしなみを中心とした指導を粘り強く行った。遅刻については、多くの生徒において意識の定着が見られ、遅刻件数も減少傾向となった。しかし一方で、年間を通して同じ生徒が繰り返し遅刻する傾向があり、次年度以降は学年団と更に協力し、指導を行いたい。頭髪については、定期試験中のチェック以外に、気づいた段階で声をかけ改善の指導を行った。担任の先生と連携をとりながら、制服の着用や頭髪の整え方など、基本的な部分について繰り返し声かけを行うことで、生徒の意識改善が徐々に見られたが、こちら側が声かけをしなくなると一気に身だしなみが崩れてしまう傾向も見られ、次年度以降も気を抜くことなく声かけを中心に指導していきたい。特別指導に関しては、昨年度よりも微増しているが、生徒達の成長を感じられる場面が行事等で多く見られた。日頃の教職員の生徒との関係性が大きく関係していると思われ、生徒自身が「見てもらっている」感覚を持っているのではと考える。指導の成果として一定の改善が見られる一方、なお課題の残る生徒もおり、今後も粘り強く指導を継続していく必要がある。改めて、教員が生徒と関係性をしっかり持っておくことの重要性を感じた。 いじめ防止に関する取組について、認知件数は少ないものの、クラス内での人間関係構築がうまくいかない生徒もいるのが、課題であった。その都度各担任と連携し、指導・支援を行った。また、認知に関しても担任のきめ細やかな聞き取りと声かけにより、大事にはなっていない。これまで通り、担任と密に連携し、教職員による観察や面談を通して生徒の小さな変化を把握し、生徒が安心して安全に学校生活を送れるよう努めたい。引き続き未然防止・早期発見を目指して粘り強く取り組んでいく。 今年度の文化祭では、日程、取り組み内容を大きく変更した。昨年度同様の取り組みの前例がなく、準備や運営の面で不安を抱える場面もあったが、大きなトラブルもなく無事に発表を終えることができた。互いに協力しながら主体的に取り組む姿勢が見られ、生徒の成長や自信につながる機会となった。体育祭に関しては、体育委員・運営委員を中心に運営を行った。想像以上に生徒が活躍してくれたことに感動を覚えた。生徒の可能性を感じられた行事運営となった。 日常の生活習慣を定着させるとともに、生徒自身が日常生活を自己管理できる力を育むことを目標に、行事等を通じて培った協働の姿勢を様々な学校生活にも生かせるよう、指導を継続したい。
		指導生徒の理解に努め、「課題予防的生徒指導」を有し、個々に合った生徒指導を実践する。また、全ての生徒が認められている・満たされているとの思い（自己有用感）を獲得できる取組を行う。	B	A		
	褒める機会の充実を図り、生徒の自己肯定感を高める取組を進める。	各行事への取組を通して、クラス・委員会の自治力を高め、自分たちで行事を創り上げる力を育成する。行事後、「やりきった」と達成感を得られる生徒の割合を増やす。	B	A		
	いじめの未然防止、早期発見に努め、いじめが発生した際には迅速かつ適正に対処する。	いじめ許さない態度・能力を育成するために、人権学習を充実させ、日々のあらゆる教育活動を通じて自他の人権を尊重する指導を行う。 日常の生徒理解、いじめアンケート、面談等により早期発見に努め、発生した際には迅速かつ適切な情報共有、いじめ対策委員会を中心とした組織的な対応等を行う。	B	A		
	3年生進学希望者の、希望実現率100%を目指す。	学年部・教科と連携し、学力実態・進路希望などの情報共有を図り、時期に応じて検討会を実施するなど、個々の進路に対応した入試対策指導を行う。進路未定者には早期にアプローチしていく。	B	A		3年生進学希望者の希望実現率を100%にするためには、1，2年生から動き出すことが重要になる。例年の「反省」を踏まえていくつか取り組んだことがある。 ①　2年生の夏の三者面談を、生徒が自身の進路について表明をする場と設定した（3年生の4月に生徒と保護者の思いが食い違うケースを何度か経験したため） ②　2年生の志望理由書模試に向けて、HRなどの時間を使って指導していただいた（総合型の入試が大きなウェイトを占めてきた現状を踏まえて、早期に意識付けを図る） しかし、数々の足りない部分がある。
		多様な入試に対応できるように、適切な進学補習講座・面接対策講座を設定し、実施する。自学自習を基礎とした効果的な補習の在り方を工夫し、学力伸長を図る。昨年度より始めた「プレゼン・トライアル」を継続して実施し明確な目標や目的意識を持って学習に取り組ませる。1年次の小論文指導（模試）、2年次の志望理由書指導（模試）を土台に、総合型選抜、学校推薦型選抜を意識した全教職員による個別指導につなげていく。	B	B		
		各種模擬試験を受けるよう指導し、それらに対して目標設定・受験・受験直後の復習・答案返却後の復習のPDCAサイクルを確立させる。「自己投資会（自学自習集団）」においても面談などを通して、生徒の歩みを援助する。	B	B		

進路指導 （進路指導部）		入試の傾向や対策について進路部通信や研修会を通じて、教職員・生徒への発信と情報の共有に努める。	B	B	B	1）2年生の1月、四年制大学進学希望者に対象を絞ってアンケートを取ったが、その75%は「家庭学習が0～30分」である。大多数が「受験」を意識せず、あるいは定期テストで点数を取ることにだけ重きを置いていることを示しているのではないか。入学当初から「学習」に軸足を置かせることが重要である。そういう意味では四年制大学志望者には「推薦」「一般」を軸に考えさせ、「総合型」のみに特化した準備や評定のみに頼った指定校推薦の受験を奨励すべきではないと考える。 2）1年生の2月に進路別学習会を実施した。純粋に「勉強頑張ろう」「休まないようにしよう」と感想や決意を述べてくれるが、これはもっと早期に気づくべきことではなかったか。インターンシップの取り組みと並行して、進路実現についての基本的な知識について早い時期（コース選択の前）に進路について一定のレクチャーをしておく必要がある。 3）学習意識の高い生徒を集め、指導することは一定の効果を生むと考えられる。「自己投資会」もその流れを汲むものだ。しかし、放課後の時間を利用した希望者を対象とした取り組みは思った以上に困難である。本来ならば「プログレスコース」がその集団となるはずだが、約束事であるはずの「模試の受験」や「進学補習への参加」にほころびが見える。1年生のミックスHRも、残念ながらコースの意識を高めることを困難にしている。「学習集団をどうつくるか」を今一度検討する必要性を感じる。 4）本校生徒の場合、全体での指導とともに「個別指導」が必要になる。しかし多忙な日常の中でひとりひとりに寄り添える時間は多くはとれない。Classiの課題配信機能の可能性も探っていきたい。 5）進路未定の生徒を導くのにも「個別指導」が必要になる。自分と向き合うことを後回しにする。生徒には、期限付きでの自己決定を迫る必要がある。担任団による丁寧な指導のおかけで「未定の」まま卒業式を迎える生徒は少なくなっている。 本校のように就職指導を2年生から行うことは珍しい。いろいろな「失敗」から学んだ結果と聞いている。就職を目指すことは、いち早く大人（社会人）になる覚悟を決めること。そういう意識を持てるように生徒に迫っている。現実的には、3年生の4月に、あるいは夏が終わってからなど、ぽつりぽつりと新たな就職希望者が現れる。その都度対応せざるを得ないが、必要な指導が十分にできない上に、志望先の企業の人員が時間とともに充足していくので、決断は2年生のうちにさせたいものである。
	学校紹介を希望する3年生の、就職内定率100%を目指す。	2年生の秋から就職指導を開始し高校生の就職制度を理解させ、生徒の希望や適性に応じた指導を学年部や外部機関と連携して実施する。また、就職に向けて基礎学力と社会の一般常識を身につけさせる学習に取り組ませる。	B	A		
		社会人としてのマナーの習得や基本技能の習得や対人能力の向上を図る指導を行う。必要な「我慢」ができる、粘り強さも育てていく。	B	A		
		面接対策を徹底する。身だしなみや入退出などの礼儀作法、言葉遣いなどについて粘り強く指導する。また、社会人を面接官として招聘し、実践的な模擬面接を設定する。内定後も社会人になるという自覚を持たせるよう指導を継続する。	B	A		
	進路希望実現率が100%になるように、1，2年生に対し早期から具体的な見通しを持たせる。	生徒の進路希望を早期に把握し、高校3年間を見通した進路実現への道筋を考えさせる。本年度より始めるBenesse「進路達成プログラム」を活用しながら段階を踏んで指導していく。また「自己投資会」の取り組みを継続し、生徒が計画的・自発的に学習するためのきっかけづくりや環境整備を行う。他分掌と連携し、毎日の学習・学校生活を大切にする取り組みや進学補習・夏期進学セミナーなどを充実したものにさせる。書く力を育てるため、日頃より文章を書く癖をつけさせ「ステップ小論文」「志望理由書マスターノート」等を活用する取り組みを進める。	B	B		
		進路別・分野別説明会の実施や進路部通信の発行などにより適切な情報提供を行い、進路に対する生徒の意識を高め具体的な見通しを持たせる。2年生の3学期までに生徒が自らの志望を宣言できるように導いていく。	B	B		
	ICT教材や学習支援サービスを充実させる。	生徒の学習習慣を形成し、自ら伸びていく力を育むために、WEBテスト、動画の配信、学習時間の記録などの教材やしくみを効果的に使っていく。	C	C		
学校保健 学校安全教育 特別支援 （保健部）	生徒を理解し、他教職員と協力して支援の充実を図る。 生徒の健康についての意識を高める。 環境問題・環境美化に対する生徒・教職員の意識の向上を図り、安全で快適な学校環境の整備に取り組む。	様々な課題や不安を抱える生徒・保護者に対し、スクールカウンセラーや関係機関と連携を図り、指導・支援の方法を担任・教科担当者と共有し、支援体制を整える。	B	A	A	・支援体制については、現状の人員でできることはできているが、支援を必要としている生徒の数（潜在的なものも含む）が多く、手が回っていない面はある。対策として、SCの常駐・養護教諭の正規職員複数配置・特別支援教育コーディネーターの授業時間和軽減などが望まれる。 ・健康教育については、薬物乱用防止教室・性教育講演会をそれぞれ2学年にわたって実施した。また、「京都プレコン」を利用した性教育授業を2年生で行った。 健康診断の事後指導については、肥満の生徒に対する栄養指導、要精密検査の生徒に対する受診指示などを行った。 ・ゴミステーションでの日々の指導で、分別についてはかなり整理されてきている。量のさらなる削減については、美化週間での取り組みや、HRでの呼びかけを継続して行う。
		薬物乱用防止教室や性教育講演会を実施し、適切な行動選択や意思決定が可能な生徒の育成を図る。また、健康診断等の事後指導に力を入れ、自身の健康についての生徒の意識を高めるよう試みる。	B	A		
		公共の場である学校で、掃除担当者だけでなく一人一人が分別・清掃の意識を持って環境美化に日々取り組むように指導する。 昨年度に引き続きゴミステーションでのゴミの分別指導、美化週間でのゴミ分別・削減の取り組みを行う。	B	B		
特色推進 広報活動 ICT教育 読書指導 （総務企画部）	・ホームページや公式SNSを通じての広報活動を充実させる。 ・学校内外へ本校の特色や教育活動を発信し、学校と地域・保護者との相互の良好な関係性を構築をする。	学校ホームページや公式SNSを随時更新して、本校の教育活動や生徒の様子等についての発信を継続する。また、今年度から新たに始まる取組を積極的に発信する。	B	A	A	学校公開の周知を公式SNSで発信することで、申込者数増加の効果が得られた。また、公式SNSの投稿計画を作成し、本校の教育活動や本校生徒の様子を発信した。学校行事だけでなく生徒の特技や卒業生からのメッセージなど内容面でも多様な発信ができた。発信する内容については、今後も検討を継続する。 学校公開では、在校生による発表は中学生及び保護者から好評である。生徒による個別対応ブースや成果物エリアなど、全体説明会以外でも生徒の様子を来校者に伝えるコンテンツを検討していきたい。 部活動体験の実施日については、中学校の大会と重なり参加できない中学生が多数いた。次年度に向けて、大会日程等を考慮した日程を設定した。
		学校公開では、中学生にとって”この学校に通いたい”と思ってもらえるようなインパクトのあるものにするために、工夫を凝らす。	B	A		
		学校の内外に向けて丁寧な情報提供を行い、保護者や地域、中学校から信頼される学校を目指す。	B	B		
	・生徒が端末を適切に管理・活用する力を養うためのサポートを行う。 ・端末の管理・整備を行うとともに、教職員へのICT教育への関心・意欲やICTのスキルを高めるための研修を行う。	学習用端末やアプリ、各アカウントの管理やトラブルの対応を行い、生徒と教員が円滑に授業でICT活用できるようにサポートする。 また、利用規程や使用方法を周知し、情報モラルの向上を図る。	B	B	B	1年生のロイロノート利用開始段階で正しくログインできているかを確認する仕組みを導入したことで、生徒個別の状況を把握することができた。年度途中での学習用端末及び視聴覚機器のトラブルに対しても複数の教員で対応にあたることができた。生徒自身の適切な機器使用については、ICT教育推進会議での議論を中心に改善案の検討を継続する。 ICT活用推進のため、一部機器の使用マニュアルを作成し、学校行事や授業で活用できるように整備した。残りの機器の使用マニュアルの作成するとともに、全教職員がマニュアルにアクセスしやすい仕組みの設計を進める。また、活用事例の発信も強化し、様々な場面での活用を推進する。
		学校全体でICT活用が進むよう研修会等を通じて、操作方法や活用方法・活用事例の共有を行う。	C	B		
	生徒の読書離れ・活字離れの現状の改善に努め、利用者の視点に立った図書館運営を行う。	図書館だよりや図書委員会だよりを定期的に発行し、生徒おすすめ図書などの情報を提示する。また、図書委員会の活動を通じて、本の魅力を発信する。	B	B		図書館前モニター・Classi配信などによる全校生徒に対する情報発信をコンスタントに行っている。 図書委員会活動については、日常的な当番活動により、一人一人の活動が、全体の成果につながることを実感できる形式が定着してきたが、生徒自身のリーダーシップを発揮させるところまではできていないが、図書委員全員による「生徒への発信」として、図書委員会だよりの発行と、コーナー展示をおこなった。 個々の先生方、生徒からのレファレンス、リクエストにはほぼすべて対応できた。
		教科での図書資料活用の推進や一斉読書週間の実施を通して、本に触れる機会を確保する。	C	B		

教育環境整備（事務部）	・安心・安全な施設設備の維持管理を図る。	定期的に施設設備の点検を実施し、危険箇所等の早期発見、早期対応に努めるとともに、安全に施設設備を使用できるよう維持管理に努める。また、継続校として採択されたDXハイスクール予算の執行及び、新築倉庫等新たに加わった施設設備について継続して適正な環境が維持できるよう運用に関するルールを調整し、策定する。	B	B	A	施設設備の老朽化に伴い不具合が頻発している状況ではあるが、早期対応を基本方針とし、学校運営への影響を最小限に抑えるよう努めている。新築倉庫については、各分掌からの要望に対し、可能な範囲で対応を進めている。DX予算については現在執行検討段階にあり、教育活動の充実に資するよう、早期執行に向けた準備を着実に進めている。
	・特色ある教育活動や広報活動等の実施のため、学校予算を効率的に執行する。	各分掌・教科との連携をとりながら効率的な予算執行に努める。	A	A		予算執行にあたり、各分掌・教科との連携を重視し、要望に対して柔軟かつ現実的な対応を行った。代替案の提示や優先順位の整理を通じて、限られた資源の中でも教育活動の充実に資する予算配分が実現できたと考える。
	・修学支援	援護制度について周知を図り、生徒の修学や希望進路の実現を支援する。	A	A		援護制度の周知に関しては、学年との連携を図りながら継続的に取り組んでおり、生徒や保護者に対して必要な情報を的確に提供できるよう努めている。各種修学援助制度については、単なる周知にとどまらず、個別の質問や相談にも丁寧かつ迅速に対応することで、生徒の修学継続や希望進路の実現に向けた支援体制の充実を図っている。
第1学年部	社会で大切にされる人になるための基盤の育成	・学習習慣確立のために日々の授業に一生懸命取り組ませ、授業規律も守らせる。その中で、教科担当と日頃から密に連絡を取り、生徒の情報把握に務め、様々な事柄に対して早期の対応ができるようにする。 ・週一回の放課後を利用し、学習できる空間、教え合いや教科の質問などが自主的に参加できる場の提供を行う。また、授業に遅れている生徒など放課後に来させ、サポートする体制を構築する。	B	B	B	授業の規律等は大半の生徒が守ることができた。学習面で非常に苦労する生徒も多数おり、教科担当者と連携を図りながら対応したが、生徒のモチベーションを保ち、見通しを持って頑張らせることに苦労した。生徒の状況把握及び対応を今以上に早期にしていく必要性がある。 週一回の学習会は定期的に継続しており、より高みを目指した生徒は年間通し様々な課題に取り組み、学習習慣の確率に向けて励むことができた。次年度はより進路をイメージさせ、同じ意識を持った生徒を増やせるよう働きかけをしていきたい。
		・職業体験等様々な活動を常に意識させる中で、日々の挨拶を積極的に行うこと、時間、〆切を守ることの大切さを伝えるなど当たり前のことを当たり前にできるようにする。また、何事にも素直さ、正直さ、誠実さを持って取り組ませる。 ・学年全体で生徒を見守るため、担任だけでなく、定期的にSHRでの担当を入れ替え、様々な教員が多くの生徒と関わる機会を作る。	B	B		職業体験や様々な行事を通して挨拶の大切さ、時間・〆切を守ることの大切さについて学年全体で伝え続けた。しかし、学校生活において遅刻・欠席過多の生徒も多かった。そのような生徒に学年として関わりながら粘り強く指導を続けてきたが、今まで以上に関わり、対話を増やし、当たり前のことを当たり前に行う大切さについて指導をしていく必要性がある。今年度大切にしてきた素直・正直・誠実な対応は来年度も大切にさせていきたい。
		・クラス内での活動、様々な行事を通して多くの人や様々な考え方に触れることでコミュニケーション能力を高められるようにする。 ・各行事で他者と協力することで得られる達成感や充実感を味わわせるのために本気で取り組むことの大切さを学年一体となり指導する。	B	A		年間を通し、各行事に一生懸命取り組む姿勢は学年全体として達成できた。様々な行事でクラスの枠を越え、コミュニケーションを図る機会をたくさん設定していただけたことで生徒も前向きに取り組むことができた。学年が上がるにつれてより良くなっていけるよう学年全体の指導をしていきたい。
第2学年部	社会の一員として、社会に通用する規則的で正しい生活習慣の確立	学校生活のルールが定着するように、積極的に声掛けをする。また、生徒同士でも行事などを通じて社会性が身につくように導いていく。また、ルールの守れていない生徒に対して個別に対応するだけでなく、集団として改善されるように方向付けをする。	B	B	B	安易な遅刻や早退をしている生徒や行事での欠席が目立つ生徒に声掛けを続けることができた。行事欠席者には補充をすることで休み得を感じる生徒を減らすことができた。最終学年を迎えるにあたり、社会性が身につくように働きかける。
	自学自習を最終目標とする学習習慣の確立	日々の授業を大切にすることを伝えることで、基礎学力を身につけさせる。あわせて、自宅学習が必要となるような課題を教科と連携して提供することで、家庭学習の習慣をつけさせる。	C	B		進級に向けて、授業の大切さを伝え、生徒の学習に対する意識を改善することができた。一方で、進学希望者に高い意識を持たせるために進学補習や模擬試験の受験の意義を引き続き訴えかけていく。
	常に目配り、気配り、心配りを行い、仲間とともに協力・成長する力の育成	様々な生徒が同じ環境にいることを理解させ、お互いを認め合いながら常に自分事として考える機会を設け、他者を思いやることができるようにする。	B	B		多くの生徒は、規則正しい高校生活を送ることができた。互いに認め尊重しあうように、諸行事やホームルーム活動などを通して身につけさせる。
第3学年部	学校生活を充実させ、希望進路を実現するとともに、卒業後の自分のあり方を見通しながら行動できるよう促す。	・時間や〆切を守って行動できるように促し、欠席・遅刻過多による原級留置を減らす。学年による遅刻指導、行事の補充を継続して行う。 ・プライベート、オフィシャル、フォーマルの違いを意識させながら、TPOに応じた身だしなみが自発的にできるように指導する。 ・スマホや学習端末の使用ルールを理解し、守れるように促す。SNSとのつき合い方についても考えさせる機会を作りながら、正しく使用できるよう促す。 ・以上のことについて、他分掌と連携しながら、また保護者の理解を得ながら日々の指導に当たる。	C	B	B	・遅刻や欠課の多い生徒は絞られてきたが、2学期後半になって進路が決定したり単位認定の見込みが出てきたりしたことで、緩む生徒も出てきた。学年による大幅遅刻指導を2学期末考査最終日に1回だけ実施して以降、無断での遅刻欠席はやや減ったが、欠課時数オーバーでの単位不認定が19科目と多かった。 ・身だしなみについては、自発的に整えられる生徒もいるものの、スカート・ジャージーや頭髪については日常的にできているとは言えず、式典の際の身だしなみもやや不十分。冬休み明けには帰宅指導も行った。 ・スマホや端末の使用、SNSとのつき合い方については学年が上がるにつれてトラブルが減った。 ・様々な生徒指導事象に関しては、生徒指導部と連携しながら、早めに対応することができた。保護者とも良好な関係を築きながら協力して指導にあたることができた。
		・授業に主体的に参加し、学習習慣を身につけるよう促す。過程を大切に、まずは自分の力でやってみて、粘り強く最後までやりきるよう促す。つまずきを抱える生徒に対しては個別指導も含めて丁寧に指導に当たる。 ・ことばの力の育成に努め、思考や感性を育む。HRなどを通じて様々な文章を読ませ、多様な考え方を知る機会をつくる。行事等を通して積極的にコミュニケーションを図るよう促す。希望進路の実現に向けて志望理由書や自己推薦書などに計画的かつ丁寧に取り組ませる。 ・進路指導部と連携しながら情報提供を適宜行い、希望進路の実現を図る。	C	B		・欠席過多、体調不良、成績不良から転退学に至る生徒が今年度3名。（3年間で24名。） ・志望理由書や面接で多くの先生方に丁寧に指導していただき、多くの生徒が総合型選抜等で希望進路を実現することができた。就職についても2学期後半や冬休みから動き始める生徒もいたが、丁寧に指導していただき、希望する就職先への内定を得ることができた。 ・授業はおおむね落ち着いて受けることができていた。学習に遅れを抱える生徒は素直に考査前学習会に参加したり、友人の力を借りたりしながら努力する姿が見られた。最後まで全力で取り組む生徒、入試に力点を置いた生徒、気の緩みが出てしまった生徒がいたものの、考査では概ね努力の結果が出せた。 ・3年間を通して読み書きする時間を取り、そのフィードバックもしてきた。ある程度言語化する力をつけることができた。
		・互いが気持ちよく過ごせるよう、挨拶、場面に応じた言葉遣い、清掃活動やゴミの分別ができるように促す。自分の進路が決まってからも、周囲への配慮ができるよう、また卒業後の自分自身のあり方を見通して行動できるよう促す。 ・人権について様々な機会に考えさせ、正しい理解をするとともに自分の言動につなげることができるよう指導する。 ・行事や部活動、生徒会活動などに最高学年として取り組めるよう、また自分とは合わないと感じられる相手とも協同してものごとに取り組むことができるよう指導する。とりわけ文化祭において、質の高い演劇発表ができるよう取り組ませる。 ・各分掌や各部活動顧問、保護者と連携しながら、生徒の実態把握に努め、細やかな指導に生かす。特別な支援の必要な生徒についての情報共有を図る。	B	A		・一部に行儀が悪く、清掃やゴミの分別に取り組めない生徒もいるが、ほとんどの生徒が気持ちよく学校生活を過ごせるような振る舞いができる。ロッカーや下足箱の使用、私物の持ち帰りについてもほぼ適切である。 ・自分とは合わないと感じられる相手とも、ぶつかることなく距離を置いて接することができる生徒が多い。折に触れて注意をしてきたが、男子の一部に幼いイジリ行為が見られた。 ・集団に入ることが苦手な生徒も一部にいるものの、基本的には周囲と協力しつつ、熱心に行事に取り組むことができた。行事、部活動、生徒会のいずれにおいてもリーダーシップを発揮できる生徒がおり、それぞれが各自の持ち場で自分の力を発揮することができた。 ・支援の必要な生徒については、1年生から継続的に各分掌と連携しつつ見守ることで、落ち着いた学校生活を送ることができ、また希望進路の実現もできた。

評価の基準　A：十分達成できている、（目標以上の成果が得られている。）　B：ほぼ達成できている。（ほぼ目標通りの成果が得られている。）　C：達成できているとはいえない。（成果はあったが、目標は達成できていない。）　D：ほとんど達成できていない。（ほとんど成果が得られていない。）

学校関係者評価委員会による評価	学習指導・生徒指導・進路指導の各分野において、教職員が連携しながら生徒一人ひとりに寄り添った丁寧な指導が行われており、概ね目標に沿った成果が見られる点は高く評価できる。特に、行事や日常指導を通じて生徒の主体性や協働性を育む取組や、進路実現に向けた個別指導の充実は、生徒の成長に大きく寄与していると考えられる。 一方で、家庭学習習慣の定着や学習意欲の向上、遅刻・欠席の改善などについては課題が見られる。また、ICT活用や授業改善に関しては取組が進んでいるものの、教職員間での実践共有や組織的な深化において、さらなる工夫の余地がある。 全体として、教育活動は着実に前進しており、今後は取組の質をさらに高めるとともに、組織的な連携を一層強化することで、学校全体の教育力向上が期待される。 なお、Be-Workの一環として初の試みである1年生のインターンシップは、生徒の実業体験による成長は基より、若手教員の育成にもつながる大変有意義な取組であったことを申し添えたい。
次年度に向けた改善の方向性	・家庭学習習慣の定着のため、1年次から「学習と進路の関係」を明確にする系統的指導を行い、学年部・教科・進路指導部が共通認識をもった学習量・学習姿勢の基準づくりを行う。 ・1年次早期から希望進路別の学習モデルを提示するとともに、学習集団の在り方を再検討する。また1年次の職業体験を核としたキャリア教育をさらに充実させて体系化をはかり、希望進路を実現させる。あわせて社会貢献の意識を養う。 ・キャリア教育（Be-Happy）では、今年度から1年次で職業体験を実施した。次年度は2年次でアントレプレナーシップ教育を実施し、地元企業と更に連携して、生徒の主体性や創造性、困難に挑戦する姿勢を養う。 ・ICTを活用した「学習の見える化（記録・振り返り）」の徹底を行う。 ・ICT活用・DX推進について、授業でどのように使うかへの段階的研修を行う。 ・効果的な広報活動の在り方の検討を継続し、中学生・保護者が本校の特色を理解した上で選ばれる学校づくりをすすめる。 ・「働き方改革」をさらに進めるため、生成AIを効果的に活用するとともに、各分掌の業務を精選し、さらに業務改善を進める。